

○中国文化学会 平成 30 年度大会 講演会

飛鳥と降り立った「真意」—陶淵明 「飲酒」詩の寓意

沼 口 勝

はじめに

陶淵明（三六五～四二七）の五言詩二十首の連作が「飲酒」と題された典拠と寓意、また連作の〈其四〉〈其五〉の詩に詠う帰鳥のイメージと『易』の卦辞・爻辞およびその王弼の注との関連について私見をお話したいと思います。ただしこの私見というのは、下記のように二十年も前に発表した論文をもとにしたものであります。

(一) 陶淵明の「飲酒」の詩題の典拠とその寓意について（『六朝学術学会報』第一集 一九九九年十月）

(二) 「飲酒」〈其五〉の詩の一解釈—その帰鳥のイメージと『易』との関連を中心として—（『中国文化』第五七号 一九九九年六月）

ところでこの二篇は、(一)が「九江師專学報 第21巻 二〇〇二年第二期」に李寅生氏の訳により「從帰鳥意象与《易经》之關係釋陶淵明《飲酒》（其五）詩」として掲載され、(二)は「蘇州教育学院学報 第35巻 2018年第一期」に龔斌氏の推薦文、李寅生氏の訳により「略論陶淵明《飲酒》詩題的典故及其寓意」として掲載されたことを報告したいと思います。陶淵明の作品の寓意についての拙稿の大半は、中国において翻訳紹介されているようです。

一 「飲酒」という詩題の典拠とその寓意について

①【「飲酒」と題するいわれについての通説】

「飲酒」と題することに関しては諸説あるが、いずれも確たる根拠なく、「飲酒」の序に拠って説をなすようなものが多い。例えば近年の大著、袁行霈撰『陶淵明集箋注』（中華書局 二〇〇三年四月）の【題解】を挙げるならば、次のようである。

☆「詩序に拠れば、此の二十首は皆酒後作る所にして、故に題して《飲酒》と曰う。（略）方東樹《昭昧詹言》に曰く『序に拠れば亦是れ雜詩なり、胸臆を直書し、其の事を直書し、飲酒に借りて題と為すのみ、飲酒を詠ずるに

非ざるなり』』という。

☆ 飲酒（二十首）の序

余間居寡歡、兼比夜已長、偶有名酒、無夕不飲。顧影独尽、忽焉復醉。既醉之後、輒題數句自娛、紙墨遂多、辭無詮次。聊命故人書之、以為歡笑爾。

② 【寓意の所在を指すと思われる典拠】

発表者が提起する「飲酒」という詩題の寓意の所在を指すと思われる典拠は、次の二種である。

X 「敵に克って酒を飲む 克（剋）敵飲酒」（『易林』の繇辭）

Y 「孚（まこと）有りて于（ここ）に酒を飲む 有孚于飲酒」（『周易』の爻辭）

Xは漢の焦贛（しょうこう）、字は延寿の著と伝える『焦氏易林』十六巻中の繇辭（占いのことば）、また、Yは『易』の六十四卦の一「未済（びせい）」の卦の「上九」の爻辭で、それぞれが異なる意味をもつ。詩題の「飲酒」はその相異なる二つの意味を併せもつということになる。次にX・Yそれぞれについて説明したい。

③ X【敵に克って酒を飲む】とは、『易林』巻十六の繇辭〈小過之未済〉の一句である。

六月采芑、征伐无道、張仲方叔、克敵飲酒。 六月・采芑（さいき）は、无道を征伐す。張仲・方叔ら、敵に克って酒を飲む。

この辭に付す「旧註」に、「六月・采芑は、皆詩の名。六月は建未の月なり。時に獯豨内侵し、宣王尹吉甫に命じ師を帥いて之を伐たしめ、功有りて帰る。詩人歌を作り、以て其の事を叙す。司馬法に冬夏師を興さずと。今六月にして師を出すは、獯豨の故を以てなり。采芑の詩は、蛮荊背叛し、王方叔に命じ南征せしめ、軍行芑を采りて食らう。故に其の事を賦す。張仲は吉甫の友、是の時の燕飲に、張仲在り。」と説く。

これによればこの繇辭は、詩の小雅「六月」「采芑」の二篇が周の宣王の時、北の獯豨の侵入、南の蛮荊の反乱を征伐して、功有った張仲や方叔らが、凱旋の祝い酒を飲んでいることを詠ったのだというのである。

さて時が移り東晋の末期、劉裕の北伐（南燕・後秦を征服）南征（盧循を討滅）を、上の周の宣王の北伐（獯豨征伐）南征（蛮荊討滅）に擬する史実があった。その資料を列挙する。

☆ア 劉裕の北征するや、帝（司馬徳文、のちの恭帝）上疏して、「請う蒞む所を帥い、行を戎路（兵車）に啓き、敬を山陵に修めん」と。朝廷之れに従い、乃ち裕と俱に発す。（『晋書』「恭帝紀」義熙十二年・四一六、八月）⇒

「六月」の詩の〈元戎十乘、以先啓行〉に対応。

☆イ 鞠旅揚城、大蒐徐方、旅旌首路、元戎啓行。（旅に揚城にいでたちを鞠げ、大いに徐の方に蒐む。旅の旌 路に首し、元戎行を啓く。）（傳亮「武帝の関中を平らぐるに従う詩」武帝はのちの宋の武帝、劉裕。関中は関中の誤り。）⇒前に同じ。

☆ウ 故の左將軍・青州刺史王鎮惡は、荊・郢に之れ捷ち、放命を剋翦し、北伐の勲は、跡を方叔に參う。（『宋書』「劉穆之伝」）⇒「采芑」の詩の〈顯允方叔、征伐玁狁、蛮荆來威。〉に対応。

☆エ 太尉臣裕は、威武明断、首に義旗を建て、元凶を除き蕩い、皇居正しきに反る。布衣匹夫にして、社稷を匡い復し、南のかた盧循を剿ぼし、北のかた広固を定む。千載以来、功与に等しくする無し。（『宋書』「武帝紀・中」司馬休之上表自陳の文）

☆オ 高祖受禪の意有れども、言に発し難し。乃ち朝臣を集め宴飲して、従容として言いて曰く、「桓玄暴かに篡い、鼎命已に移る。我大義を首唱し、皇室を復興す。南征北伐して、四海を平定し、功成り業著われて、遂に九錫を荷なう。今年將に衰暮ならんとし、崇極なること此くの如し。物は盛んに満つることを戒むれば、久しく安んず可きに非ず。今爵位を奉還して、京師に帰老せんと欲す」と。（『宋書』「傳亮伝」）

エは劉裕に圧迫され苦悩する司馬休之のことばだが、東晋朝廷を滅亡の淵から救い復興させたその功績の偉大なことを認めている。南征北伐はその大功を象徴するものであった。

陶淵明はこうした事実を踏まえて、劉裕の権勢が天下を覆いつくす時勢を「敵に克って酒を飲む」という『易林』の繇辞により寓意したものと思いたい。

④ Y【孚有りて于に酒を飲む】は、『易』の六十四卦の最終に当たる「未済」の卦の「上九」の爻辞である。未済の卦は陽爻すべてが陰位、陰爻すべてが陽位で全爻が「不正」であり、未完成の意味を表す。また「上九」は、世情から超然たる隱者を意味する。つまり不安定な司馬氏の晋王朝が終焉を迎える時の陶淵明自身に当てはまる。下に掲げる。

未済 ☱☵ 坎下離上

上九 孚有りて于に酒を飲む。咎無し。（有孚于飲酒。无咎。）

☆ 未済の極は、則ち既済に反る。既済の道は、任ずる所の者当たるなり。任ずる所の者当たれば、則ち之れを信じて疑い无かる可く、而して己逸しむなり。故に曰く、孚有りて于に酒を飲む、咎無し、と。（未済上九の爻辞の王弼注）

王弼の解釈では、未済の終極にいる上九は、不安定の時はまさに終わり、やがて既済、安定の時が来ようとしているから、その安定をもたらす適任の者を信じて自分は逸楽するのだという。このような解釈を用いた例として、謝靈運の「九日宋公が戲馬台の集いに従い孔令を送る詩」（義熙十四年九月九日、宋公劉裕主催の彭城の戲馬台における引退する尚書令孔瓘を送別する際の作。『文選』卷二十）を掲げる

(略) 5 良辰感聖心 6 雲旗興暮節 7 鳴葭戾朱宮 8 蘭卮獻時哲
9 餞宴光有孚 10 和樂隆所欠 (略)

(良辰は聖心を感じ、雲旗は暮節に興る。鳴葭 朱宮に戻り、蘭卮 時哲に献ぐ。餞宴は孚有るを光らかにし、和樂は欠くる所を隆んにす。)

9の句に付した唐の張銑の注に「光は明、孚は信なり。餞宴の理、朝廷に信有るを明らかにするを言うなり。」という。これは王弼の解釈に拠ったもので、即ち「朝廷（ここでは劉裕）を信頼し安心して逸楽することのできる太平の世を寿ぐことが、この送別の宴の設けられた理由である」の意。「聖心」は天子の心、ここでは宋公劉裕のこころ。9、10の対句は、「未済」の卦「上九」の爻辞と『詩経』小雅「六月」の「小序」による。

それでは陶淵明が「孚ありて于に酒を飲む」のこばに寄せた真意とはどのようなものであったと考えられるか。

陶淵明の詩文には、天命を楽しんで疑わないという態度が表明されているのを見ることができる。

義熙元年（四〇五）十一月、帰田した際の作である「歸去來兮辞」の末尾にいう。

☆ 良辰を懐いて以て孤り行き、或いは杖を植てて耘耔す。東皋に登りて以て舒嘯し、清流に臨んで詩を賦す。聊か化に乗じて以て尽くるに歸し、夫の天命を楽しんで復た奚をか疑わん。

また右の文章から二十年余を経た宋の元嘉四年（四二七）、作者の死の二ヶ月前に書かれたという「自祭文」にも、天命を楽しむ態度が表明されている。

☆ 春秋代謝し、中園に務むる有り。載ち耘り載ち耔えば、廼ち育ち廼ち繁る。欣ぶに素牘を以てし、和するに七弦を以てす。冬は其の日に曝し、夏は其の泉に濯ぐ。勤めては勞を余すこと靡ければ、心に常閑有り。天を楽しみ分に委ね、以て百年に至る。

陶淵明のこの「天命を楽しむ」意を表す語が、『易』の「繫辞上傳」の「樂天知命、故不憂」（天を楽しみ命を知る、故に憂えず）ということばに基づく

ものであることは、よく知られている。淵明の天命に随順して自適する態度は、『易』の思想によるといえる。

ここで「自祭文」の「楽天委分」という語について考えたい。この「分に委ねる」とは、天から賦与された己の分を肯定し、それに従うことであろう。換言すれば、それはまた己を信じ、自信をもつことでもある。そしてこの己を信ずるということを根底において支えるのが、天命に対する信頼であろうと考えられる。

陶淵明に認められるこのような精神態度を、「有孚有て于に酒を飲む、咎無し」という爻辞に重ねて理解するならば、「有孚」とは、天命を信頼すること、またそれは天から賦与された自己の分ないしは自己そのものを信じ、自信をもつことを意味するであろう。そして、それによって、逸樂し自適することが「飲酒」の語の意味するところであり、このように生きるならば、災いに罹ることがないであろうとするのが「无咎」の語であろう。そしてここでは詳説を省くが、このような解釈は、六百年後の宋の程頤（伊川）の『易伝』に現れるようである。

【本章の結論】 以上から、「飲酒」という詩題は、『易林』の繇辞「克敵飲酒」と『易』の「未済」の卦「上九」の爻辞「有孚于飲酒」を複合して用い、劉裕の権勢が世を覆う中、至誠を以て天命に安んじ順い自適して生きようとする精神態度を寓意したものであるということができよう。

第二章 「飲酒」詩の帰鳥のイメージを解く

一 「飲酒」〈其四〉と『易』の「漸」の卦

①【「飲酒」其四・其五・其七の詩にうたう帰鳥の姿】

「飲酒」〈其五〉の詩には、仲間と連れ立って山に帰る飛鳥の姿がうたわれている。このようにねぐらに帰る鳥、すなわち帰鳥の姿をうたうのは、「飲酒」の連作中、この外に〈其四〉〈其七〉の二首の詩がある。これら三首の詩にうたう帰鳥の姿を要約すれば、次のようである。

まず、〈其四〉の詩は、その全文を失群の鳥の叙述に当て、群れを失った孤独な鳥がねぐらを求めて夜ごと悲鳴徘徊し、やがて一本松に会い、その木陰に身を託することがかない、これを終の住みかかと思定めることをうたう。この詩が作者の自序であることは諸家の説の一致するところである。続く〈其五〉の詩では、夕刻山気の美しい中、麓をさして仲間と連れ立ち帰る鳥の姿が、そして〈其七〉の詩では、日没後の安息のひとつとき、林のねぐらに帰る鳥たちの

鳴き交わす姿が、それぞれ二句にうたわれている。

② 【「帰鳥」四章の詩】

陶淵明には「飲酒」詩を制作する義熙十三年（四一七）以前の、彭沢の令を辞して帰隠する時期にも、帰鳥の姿を再三うたうことがあった。「帰去来兮辞」に「鳥は飛ぶに倦みて還るを知る」とうたうのがその一例であるが、代表として「帰鳥」の詩を挙げよう。

一章 翼翼たる帰鳥は、晨に林より去り。遠くは八表に之き、近くは雲の岑に憩う。和風洽からずして、翮を翻して心に求む。儔を顧みて相鳴き、景（すがた）を清き陰に庇われん。（春）

二章 翼翼たる帰鳥は、載ち翔け載ち飛ぶ。游を懐わずと雖も、林を見れば情は依る。雲に遇えば頽頽し、相鳴きて帰る。遐かな路は誠に悠かなるも、性の愛するところ遺る無し。（夏）

三章 翼翼たる帰鳥は、林を相（み）て徘徊す。豈に天路を思わんや、旧棲に及ぶを欣ぶ。昔の侶は無しと雖も、衆声毎に諧う。日夕氣清く、悠然たり其の懐い。（秋）

四章 翼翼たる帰鳥は、羽を寒の条に戢（おさ）む。游は曠林（戦乱の地の意。『左伝』昭公元年に不出）にせず、宿るは則ち森（たか）き標（こずえ）。晨風清らかに興り、好音時に交（ゆきか）う。矰繳奚（なん）ぞ施さん、已に卷（う）めり安くんぞ勞せんや（冬）

この詩は、作者が四〇四年劉裕の参軍として出仕し、中央の政界の状況に失望し、帰郷して隠者として生きる道を願い、選び、実現するまでの心情を帰鳥に託したものであろう。

第三章に「豈思天路、欣及旧棲。雖無昔侶、衆声每諧。日夕氣清、悠然其懐。」として、天路（官界）ではなく旧棲（故郷）に帰ることを喜び、昔侶（官界での仲間）はなくても衆声（故郷の仲間）と睦むよろこびがあり、秋の夕刻の澄み切った空気の中に感得する悠然たる心境などが表明されているが、これらは「飲酒」其四、其五、其七の詩にも表明されている。つまり、それら「飲酒」の諸篇でうたう帰鳥の姿は、「帰鳥」の詩にうたうそれと、実は同一の体験、すなわち義熙元年の帰隠の際の体験に基づくものであろう。

③ 【「飲酒」〈其四〉の詩】

栖栖失群鳥、日暮猶独飛。徘徊無定止、夜夜声転悲。厲響思清遠、去来何依依。因值孤生松、斂翮遙来帰。勁風無柴木、此蔭独不衰。託身已得所、千載不相違。

「飛鳥樹を繞りて翔け、噉噉として鳴いて群れを索む」（魏・曹植「雜詩」）というように、古来詩賦において失群の鳥は、我が身の孤独を悲しみ、もとの

群れを求めるものとしてうたわれるのを通例とする。ところが〈其四〉の「失群の鳥」は、かつて属していた群れを求めようとしない。その点「帰鳥」の詩の鳥と共通する。つまり〈其四〉の詩の冒頭からの八句は、作者の義熙元年（四〇五）の帰隱の際の体験と心情とを追懐して、これを鳥の姿に託したものであろう。そして、第九句からの四句は、帰隱以来の隠者としての処世が、厳しい時勢に生きる道として誤りでなかったことを確認述懐したものとしてできよう。

④ 【「飲酒」其四と「漸」の卦、また「小過」の卦辞とその王弼注】

この詩の第五句「厲響 清遠を思う」の「清遠」の語について、一海知義氏は「[思清遠] 清らかなるかな境地に思いをはせる」意とし、「易経」の漸の卦の王弼注を典拠とする。（『陶淵明』昭和三十三年、岩波書店）妥当な説と思う。漸  艮下巽上

上九、鴻陸に漸（すす）む。其の羽用て儀と為す可し、吉なり。

〔王弼注〕 進んで高潔に処り、位に累わされず、物の其の心を屈し、其の志を乱す可き無く、峨峨として清遠、儀貴ぶ可きなり、故に曰く、其の羽用て儀と為す可し、吉なりと。

王弼の『易』解釈においては、「上」は無位であるがゆえに、位に累わされることのない高尚な隠者に擬されている。したがって、この「漸」の卦「上九」の爻辞も、進んで高潔の境地に居て、位に累わされることがなく、いかなる世俗もその心志を屈し乱すことができない、崇高清遠な鴻の姿のような隠者、また、その境地を象徴するのである。だとするならば、この詩の「失群の鳥」が「清遠を思う」姿とは、隠者として清遠の境地を希求してやまない、作者の強い願いの象徴として理解すべきものであろう。

〈其四〉の詩の失群の鳥が定止（ねぐら）を求め悲鳴しつつ飛ぶ姿も、「小過」の卦辞とその王弼注に由来するのではないか。

小過  艮下震上

小過は、亨る。貞しきに利ろし、小事には可なり、大事には可ならず、飛鳥之れが音を遺す、上るに宜しからず、下るに宜し、大いに吉なり。

〔王弼注〕 飛鳥其の音を遺す、声哀しくして以て処を求む、上れば愈よ適く所無く、下れば則ち安きを得、愈よ上れば則ち愈よ窮す、飛鳥に若くは莫し。

右の卦辞の一節「飛鳥遺之音、不宜上宜下、大吉。」とは、その「象伝」に「飛鳥の象有り、飛鳥之れが音を遺す、上るには宜しからず、下るには宜し、

大いに吉なりとは、上るは逆にして下るは順なればなり」と説くように、古來卦の象が飛鳥になぞらえられ、それが鳴き声を残して飛ぶとき、高く上れば行く所がなくてよろしからず、降下すれば安処を得てよろしい（上卦の象は震〈雷〉、下卦の象は艮〈山〉）と説く。これを人事に当てるならば、官途について出世するのはよろしからず、下野して隠棲すればよろしいとなろう。

⑤ 【「飲酒」〈其五〉と「小過」の卦象・卦辞】

『易』の「小過」の卦辞は、『易』で唯一「飛鳥」の語を用いるものである。その卦象・卦辞と、「飲酒」其五の詩にうたう飛鳥の姿とが深い関連をもつものではないか。〈其五〉の詩とその構成を見ることとしよう。

結廬在人境、而無車馬喧。問君何能爾、心遠地自偏。采菊東籬下、悠然見南山。山氣日夕佳、飛鳥相与還。此中有真意、欲弁已忘言。

廬を結びて人境に在り、而も車馬の喧しき無し。君に問う 何ぞ能く爾るやと、心遠ければ地自ずから偏なり。菊を采る 東籬の下、悠然として南山を見る。山氣日夕に佳なり、飛鳥 相与に還る。此の中に真意有り、弁ぜんとして欲して已に言を忘る。

一詩の構成；冒頭四句 ○人里に廬を構えながら喧騒と無縁の暮らしができるのは、隠者としての清遠の境地であることを確認している。第五―八句 ○東籬の下で菊花を採りながらふと目に入った南山の姿と、夕刻澄んだ山気の中、その山に仲間と帰る飛鳥の景をうたう。末尾二句 ○上述の光景こそ「真意」があり、それが言語で説明しがたい境地であることを示唆する。

〈其五〉の詩の第五―八句の光景と境地とは、「帰鳥」の詩の第三章にうたうそれと共通するところがある。つまりこの日頃親しんでいる光景を目にしたその瞬間、作者の脳裏に閃いたのは、この山に帰る鳥たちの姿こそ、「小過」の卦象  艮下震上（全体が飛鳥の姿、下卦が山、上卦が雷を表す）と、「飛鳥之れが音を遣す、上るに宜しからず、下るに宜し、大いに吉なり」というその卦辞の具象化されたものであるとする強い確信であったのではないか。そうしてその鳥たちのように、人境に廬を結んで隠棲する自己の処世の道が、『易』に示された聖人の教えに合致するものであったことを、作者は瞬時に悟得したのではなかったか。その悟得の境地を、「此中有真意」と表現したものと思う。すなわち「真意」とは、自然の営みの中に啓示された聖人の教えということができよう。そして悟得の境地に到達したよろこびを、結びの句「欲弁已忘言」と表したのであろう。

⑥ 【〈其五〉の詩末尾の二句と繫辞上傳】

「此中有真意、欲弁已忘言」の二句の注釈として『莊子』「外物」篇の「言は

意に在る所以なれば、意を得て言を忘る」の句が引かれることは、『文選』の李善注以来行われてきたが、上述のように末尾四句と「小過」の卦象・卦辞とが深く関連しつづつたわれているとする立場からは、なお『易』の「繫辞伝」の次の一節をその脚注に加えたいと思う。

☆ 子曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさずと、然らば則ち聖人の意は、其れ見る可からざるか。子曰く、聖人は象を立てて以て意を尽くし、卦を設けて以て情偽を尽くし、辞を繫けて以て其の言を尽くし、変じて之れを通じ以て利を尽くし、之れを鼓し之れを舞し以て神を尽くす。（繫辞上傳）

陶淵明は夕暮れに鳥たちが山に帰る光景から「小過」の卦象・卦辞を連想し、そこに啓示された聖人の真意（教え）を感じし、それを「此中有真意」といい、その深いよこびを「意を得て言を忘る」という『荘子』のこことばに拠りつつ「欲弁已忘言」と表現したものであろう。

以上により、〈其五〉の詩に現れる帰鳥の姿は、義熙元年より十三年間に及ぶ隠棲の暮らしこそ、聖人の真意にかなう処世の道であったことを作者に悟らせ、深いよこびと自信とを与えるものであったとすることができよう。

⑦ 【〈其七〉の詩と「小過」の卦辞の王弼注】

秋菊有佳色、裛露掇其英。汎此忘憂物、遠我遺世情。一觴雖獨進、杯盡盍自傾。日入群動息、歸鳥趨林鳴。嘯傲東軒下、聊復得此生。

ここでは帰鳥の姿はわずか一聯にうたうにすぎない。しかし〈其四〉〈其五〉にうたう帰鳥の姿にこの〈其七〉の帰鳥を重ね、三首一連のものとして見るならば、自然の中で仲間とともに自適するまでに至る姿を表現するものであることに気づく。そしてそれはまさに『易』の「小過」の卦辞に対する王弼の注の「（飛鳥）……下れば則ち安きを得」ということばと合致するのである。〈其七〉の詩の帰鳥もまた、作者自身の投影と解されよう。

【付記】Ⅰ 書評 「東方」二〇〇一年読者アンケート第一回

望月 眞澄（神奈川大学 中国音韻史）

沼口勝著『桃花源記の謎を解く』（日本放送出版協会 二〇〇一年）

本書には、いくつかの陶淵明の詩文についての「謎」を解明していくさまが書かれているが、なんと言っても圧巻は〈第四章「飲酒」詩の帰鳥のイメージを解く〉の部分である。著者の『易林』『周易』を陶詩の解明に引き寄せるという着想は早くから行われていたが、このことによって陶淵明の「真意」の夢が千数百年の眠りから醒めたのである。『易』の「小過」の卦は飛鳥そのものの姿で、「真意」を伴って今世紀の著者のところに、そして人類の共有財産と

しての喜びとして降り立ったといえる。

II 「帰鳥」詩の第三章〈游不曠林〉の句について、『新訳 陶淵明集』（温洪隆注訳 三民書局）は、「意謂不出遊到戦乱之地。曠林、典出《左伝・昭公元年》、抛載古時高辛氏（即帝嚳）有兩個兒子、長子叫閼伯、四子叫実沈、『居于曠林、不相能（不和睦）也、日尋干戈、以相征討』、故『曠林』為戦乱之地。」として新解を提示している。

（文教大学名誉教授）

